

大学における協働創作とコミュニケーション

— 日本映画大学初年次必修「人間総合研究」の実習をめぐって —

守内 映子¹

(日本映画大学 准教授)

〔要旨〕令和2年(2020年)末に日本に在留する外国人の数は約289万人となっているが、このうち、外国人留学生は279,597人であり、その約78%にあたる218,783人が高等教育機関で学んでいる。日本映画大学においても、ここ5年間にわたって留学生数の著しい増加が見られ、学生の約4割が留学生であり、必然的に異文化・異言語の学生同士がチームを組み、協働して映画作りの実習を行なう環境にある。

そこで、本研究では、日本映画大学の初年次必修科目「人間総合研究」という演習型の実践授業を対象とし、日本語母語話者と日本語学習者が体験するコミュニケーション上の困難点を調査し、その現状について、2018年度、2019年度、2020年度、それぞれの年度の大学1年生を対象とし実施したアンケートを主な研究資料として分析した。収集したデータについては、選択肢回答を量的に分析する一方、自由記述形式で尋ねた「大変だった理由」については、質的に分析した。

その結果、学生が最も大変だと感じたことが、日本語母語話者と日本語学習者では異なることが判明した。前者は「クラスでの話し合い」を挙げ、意見を1つにまとめなければならないという強い意識を持ち、異言語・異文化という多様性を受容することが困難な状況であった。また後者は、日本語の会話能力が人間関係を決定づける絶対的な条件だという意識から逃れることができず、その視点から自己を捉えている様子が見られた。これらの発見とデータ分析をもとに、両者が共に学ぶ共修授業に必要な、より良い人間関係構築のための学生指導のあり方について検討した。

1 moriuchi@eiga.ac.jp

[キーワード] 協働創作、グループ・ディスカッション、日本語母語話者、日本語学習者、身体性

1. はじめに

令和2年(2020年)末に日本に在留する外国人の数は、新型コロナウイルス感染拡大による入国制限等の影響により、前年(2019年)末より約4万人減少し、約289万人となったものの、「出入国管理及び難民認定法」が改正、施行された1990年末の約108万人と比べて3倍に迫る数となっている²。このうち、外国人留学生在が279,597人で、その約78%にあたる218,783人が高等教育機関で学んでいる³。

日本映画大学においては、ここ5年間にわたって留学生数の著しい増加が見られた。2021年12月現在では、学生の約4割が留学生⁴であり、必然的に異文化・異言語の学生同士がチームを組み、協働して映画作りの実習を行なう環境にある。しかし、大学一年生に在籍する日本人学生(日本語を第一言語とする学生、以下、便宜上「日本人学生」と一括して呼ぶ)のほとんどは、日本の高校を卒業したばかりであり、海外留学の経験はもとより、外国人と接した経験もほとんどないという者が多い。彼らは、異なる文化背景を持つ人々とのインタラクションの経験が乏しく、学校教育においても、異文化間能力育成を目的とした学習機会はゼロに等しかったのではないかと推察される。

日本人大学生を対象とした調査(梶原2020)によると、「日本人学生は外国人留学生との交流は自身のキャリアデザインに有益なものであると考え、外国人留学生との交流を希望しているが、『言葉の壁』や『コミュニケーション』、『文化の違い』、『話題』等の心配や不安が理由となり、自分から積極的に外国人留学生と友達になるための活動を行っている人は少なかっ

2 文化庁国語課の令和2年度「日本語教育実態調査報告書」に基づく。

3 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)のデータによる。

4 現在在籍する留学生国籍は、中国(香港含む)、韓国、台湾、タイ、ネパール、インドネシア、マレーシア、モンゴルである。過去には、ニュージーランド、アメリカ籍もあった。

た。」という。また、その一方で、私費外国人留学生生活実態調査（2019）を見ると、多くの留学生が「日本に留学しているのに日本人の友だちがなかなかできない」「学校内で日本人学生と交流できない」という悩みを抱えている。

日本映画大学は、映像制作に特化した専門性の高い大学であり、必修となっている専門実習を中心にカリキュラムが組まれ、学生たちは、チームでの協働作業を避けては通れない。そこでは、日本語母語話者か日本語学習者かといった言葉や文化の壁を乗り越えて交わらなければ一つの作品をつくり上げることができないのである。筆者が所属する日本映画大学国際交流センター留学生支援部門では、このような状況下で授業の目的を達成するために必要な、補助的な学生指導を行っている。

本稿は、日本映画大学（前身は横浜放送映画専門学院 1975 年創設）の入口部分に設けられた「人間総合研究」という開校以来の肝となっている演習型の実践授業を研究対象とし、日本人学生と留学生がものづくりの協働作業を初体験する際に直面するコミュニケーション上の困難点を洗い出し、それを分析することで、今後の共修授業⁵における学生へのサポートのあり方について考察するものである。

本稿の構成は、まず、研究対象である授業「人間総合研究」と履修学生へのアンケートについて説明し、続いて、アンケートの回答を分析して見えてきた点、すなわち、日本人学生と留学生それぞれの実習における困難さが「クラスでの話し合い」と「言葉で説明すること」に大きく分かれたこと、について考察する。さらに、実習で最も大変であった理由の自由記述をもとに、学生たちのコミュニケーション上の問題点を探る。最後に、協働作業に欠かせないものは人間関係の構築であり、そのために必要とされるのは、言葉を越えた、身体性に関わるコミュニケーションの能力であることについて論じる。

2. 独自アンケートの作成と実施

2.1 アンケート作成の背景

筆者は、2018 年度から留学生の言語や日本人とのコミュニケーションを

5 共修授業とは、日本語母語話者の学生と日本語学習者の留学生が共に学ぶ授業という意味である。

サポートする立場で、「人間総合研究」（1年生前期必修科目8単位）を支援してきた。このプロジェクト・ベースの実習では、留学生と日本人学生の混成グループ各十数人で一つの作品をつくる。学生たちは、母語や文化、価値観の異なる者との協働作業という試練を体験する。この授業は、興味深い「人物」を探し、その人について掘り下げていくのだが、動画は使わず、写真とインタビュー音声にナレーションと音楽、時には寸劇などを加えて30分の作品にして発表する。取材対象者に関しては、学生各自が企画を考え、プレゼンテーションを行ったうえで、投票により各班1本の企画に絞る。学生達は、選ばれた企画に全力を注ぎ、資料収集や調査、対象者への取材、作品の編集をすべてグループで行っていく。そのような経験を積むことで、学生達は外界の世界との接し方も身に付けていく。その期間を通して、学生同士の信頼関係が構築できない場合は、その後の大学生活全般における人間関係構築にも影響が出ている様子が見られる。

本実習を経て作品が完成した際に行われる合評会（3日間）では、実習全体を振り返る場面があるが、その際に、学生たちからは、「コミュニケーションが不十分だった」「意思の疎通ができなかった」といった言葉が頻繁に発せられた。また、指導講師や担任教師からは、「どうして人の話を聞かないのか」という声が多く聞かれた。この場合のコミュニケーションとは、情報を伝達し共有することだけを指しているのではなく、感情を伝え合い分かち合うことも含まれている。ここで言われるコミュニケーションには、意味と感情の2つの要素（齋藤 2018）が、その中心軸となっているのである。

近年、校種の違いを問わず教育の現場では、プレゼンやグループ・ディスカッション演習など様々なコミュニケーション・スキル育成の取り組みが実施されている。しかしながら、公的な場でのコミュニケーション・スキルが身に付きつつある一方で、私的な場面でのコミュニケーション・スキルの重要性については手付かずの状態だといえる。

本調査で研究対象とする「人間総合研究」は、そのような私的な場面におけるコミュニケーション上の問題点が見えてくるのである。

2.2 調査時期と対象者、調査方法

2018年度、2019年度、2020年度、それぞれの年度の大学1年生を対象とし、「人間総合研究」の実習が終了してから一定期間を置いてから実施したアンケートを主な研究資料とする。それぞれの年度における本実習の時期は、2018年6月11日から8月3日、2019年6月10日から8月3日、2020年9

月7日から10月24日であった。なお、2020年のみ例年と異なる時期に行われ、実習期間も短縮されているのは、Covid19の感染拡大に伴う影響によるものである。

学生には本調査の趣旨を説明し、回答内容と成績は無関係であることと、アンケートの提出は任意であり、個人のプライバシーを厳守し、収集したデータ内容は研究の目的以外では一切使用しないことを確認した⁶。調査項目については、留学生と日本人学生が初めての協働作業によるものづくりについて、どのような苦労や問題を感じたか、そして、そこからどんな気づきがあったかを調査するために、①実習を通して大変だったこと（質問2・3）、②実習によって得られたことと今後の目標（質問4・5）、③本実習を振り返った感覚のキーワード表記（質問6）で作成し、質問は選択式と自由記述式とした。なお、アンケート用紙は本稿末尾に資料として示した通りである。

収集したアンケートデータについては、選択肢回答を量的に分析し、自由記述の部分を質的に分析する。なお、本実習過程における参与観察のフィールドノートを補助資料とする。これは、チームの状況・問題点・対処法と、それに対応する対人関係への向き合い方を記録したものであり、各クラスで起きた「事件」や「現象」を比較・参照できるからである。

2.3 質問項目の概要と回答結果

回答結果は次の通りであった。また、質問1では、「あなたの第一言語は何ですか」と尋ね、日本人学生であるか、留学生であるかがわかるようにし、各調査項目での違いを比較検討できるようにした。

2018年は、126名中72名から回答があり（回収率57.1%）、その内訳は、日本人学生38名、留学生34名（中国31名、韓国2名、アメリカ1名）であった。2019年は、133名中117名から回答があり（回収率87.9%）、その内訳は、日本人学生63名、留学生54名（中国47名、韓国2名、台湾2名、モンゴル1名、マレーシア1名、ネパール1名）であった。2020年は、117

6 調査の協力を得ることができた調査対象者には、口頭にて研究の目的について説明し承諾を得た。その際には、今回の調査で得た個人情報に関して、研究の目的以外には一切使用しないことや、プライバシーについては責任をもって守ることなどの倫理規定を確認した。

名中 92 名から回答があり（回収率 78.6%）、その内訳は、日本人学生 57 名、留学生 35 名（中国 30 名、韓国 2 名、台湾 2 名、タイ 1 名）であった。

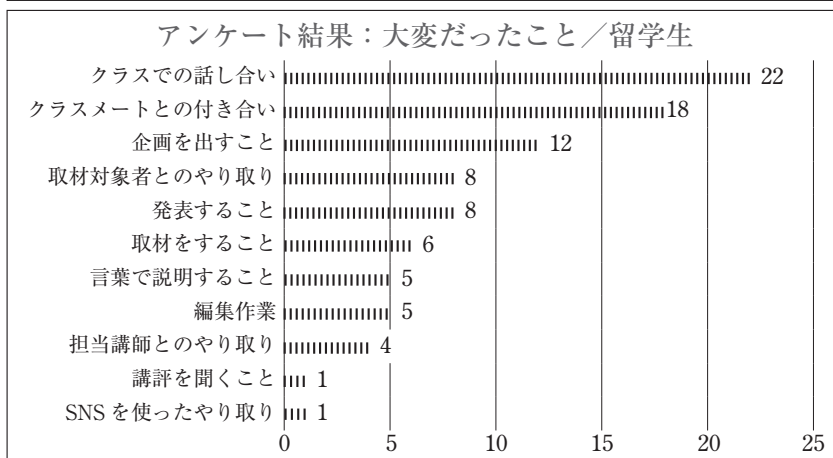
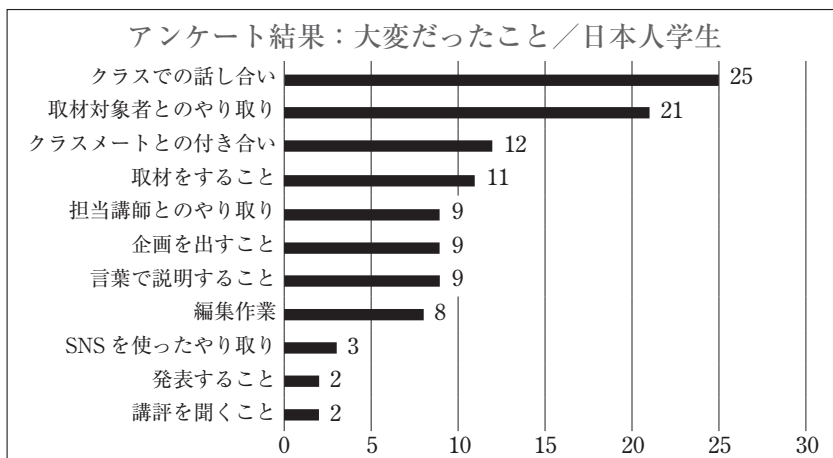
質問 2 では、「実習を通して大変だったこと」について、12 個の選択肢から 3 つ選べるようにした。その理由は、参与観察を通して、実習において大変な局面が複雑に見られたことから、回答を 1 つに絞ると、取りこぼされる項目が出るのではないかと懸念した（守内 2021）からである。そのため、数値は人数ではなく得票数として示した。図 1 はその回答結果を表したものである。

まず、2018 年度の回答結果を見ると、最も多かったのは、日本人学生、留学生ともに「クラスでの話し合い」で、次いで「クラスメートとの付き合い」だった。この年度においては、日本人学生と留学生の双方が、本実習中での企画会議や取材に関するディスカッション及び取材後の構成会議をはじめとするさまざまな話し合いに対して大変だったという認識を抱いていた者が多かったことがわかる。また、学内での授業とは言え、本実習中には他科目の授業履修はなく、全ての時間が「人間総合研究」一色に塗りつぶされる状況を考えて、多くの時間を共有するクラスメートとの付き合いに対しても、何らかの困難点が意識されていたことがうかがわれる。この年の特徴としては、大学に入学して初めての協働作業に関して、日本人学生と留学生のコミュニケーション上の困難点が共通するものであった可能性が高いということが挙げられる。

続いて、2019 年度の回答結果を見る。この年は、日本人学生が大変だったと答えたものは、「クラスでの話し合い」が抜きん出て最も多く、次いで「クラスメートとの付き合い」、「企画を出すこと」「言葉で説明すること」であった。一方、留学生が大変だったと答えたものは、「言葉で説明すること」が最も多く、次いで「企画を出すこと」「取材対象者とのやり取り」「クラスメートとの付き合い」と続いている。この年の特徴としては、日本人学生は、2018 年度の回答結果と同じく、実習中で最も苦勞したと認識していることが「クラスでの話し合い」、次いで「クラスメートとの付き合い」となっているのに対して、留学生は、「言葉で説明すること」が最も大変だったと振り返っていることが挙げられる。このことから、2019 年度の留学生は、日本語能力の問題が実習の壁となり困難さを感じる大きな要因となっていたことが推察される。

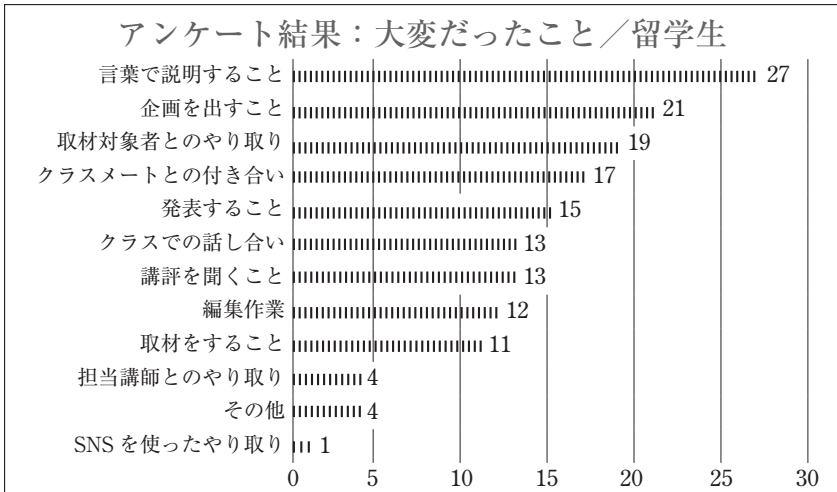
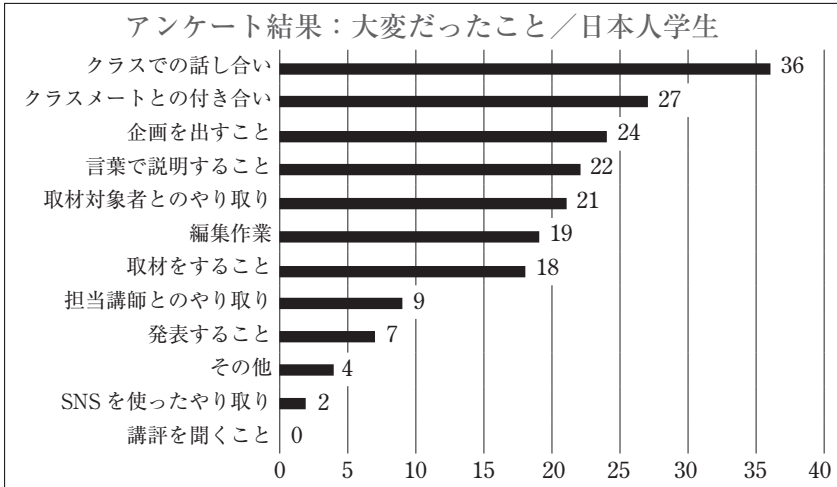
さらに、2020 年度の回答結果を見る。この年も、2019 年度と同様に、日本人学生が最も大変だったと答えたものは、「クラスでの話し合い」が抜き

図 1-1 「質問 2. 2018 年度に履修した『人間総合研究』の実習を通して大変だったことは何ですか」の結果



ん出て多く、留学生が最も大変だったと答えたものは、「言葉で説明すること」であった。この年の特徴としては、日本人学生と留学生の双方において、「クラスメートとの付き合い」を挙げた者は、2018 年度、2019 年度のデータに比して極めて少なくなっていることが挙げられるが、これにはコロナ禍が少なからず関係しているという解釈が可能であろう。世界的にコロナ感染症が拡大する中、日本国内の大学の多くがオンライン授業を実施していた 2020 年度において、本学では、感染状況の推移を見ながら開講時期を

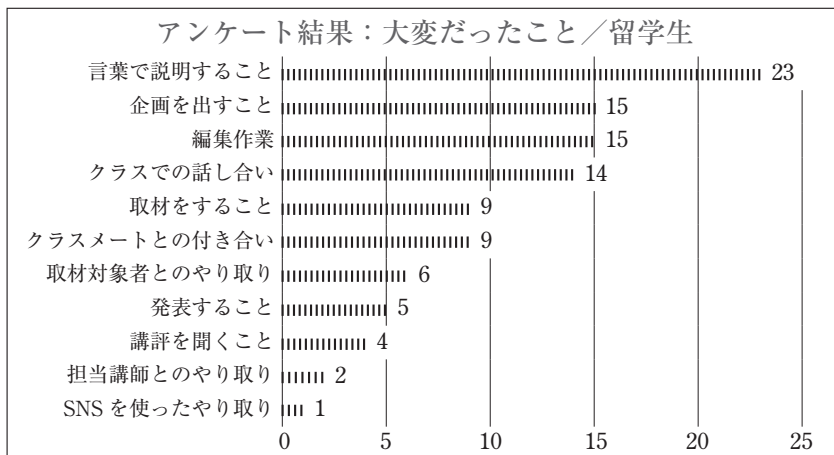
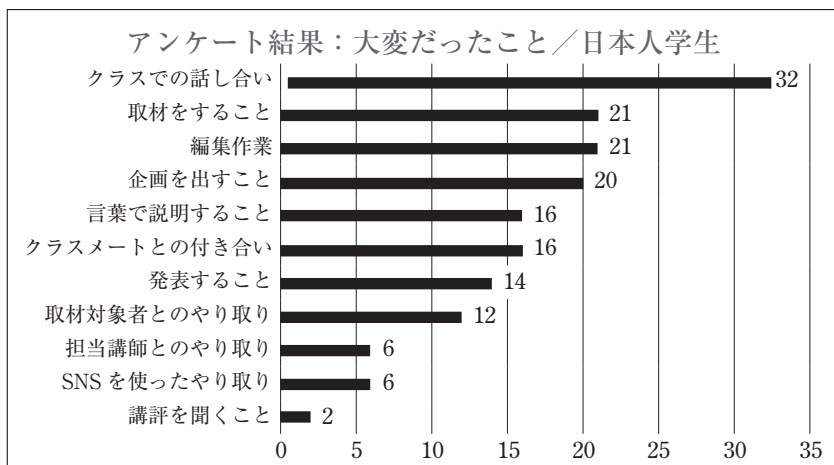
図 1-2 「質問 2. 2019 年度に履修した『人間総合研究』の実習を通して大変だったことは何ですか」の結果



調整したり、本実習を対面で遂行する上での Covid19 感染症予防対策⁷を徹

7 2020 年度「人間総合研究」新型コロナ対策ガイドラインが設けられた。それにより、基本方針が6点(検温、マスク着用、3密防止、換気、手洗い・うがい、消毒の徹底)明示された。各班では衛生担当者を決めて、体調管理や連絡のフローに

図 1-3 「質問 2. 2020 年度に履修した『人間総合研究』の実習を通して大変だったことは何ですか」の結果



底したりした結果、本実習における感染者は一人も出なかった。しかし、それは、裏を返せば、学生たちの行動が制限され、交流が必要最小限に保たれた証とも言えるのである。「クラスメートとの付き合い」を大変だと認識する以前の問題として、人間関係構築においての接触や衝突も起こらないと

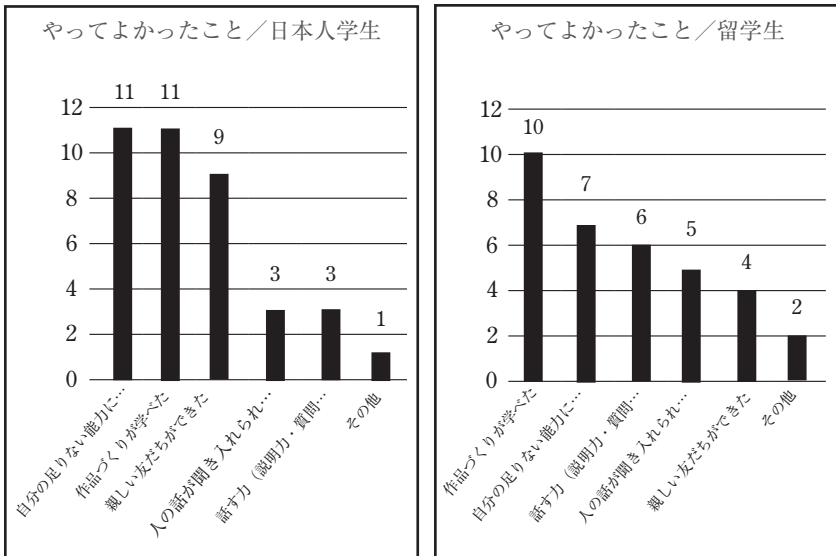
従って進めた。

いった希薄な交流に留まらざるを得ない状況であったことがうかがわれる。

最後に、質問4では、「実習をやってよかったと思うこと」について尋ねた。図2はその回答結果から2018年度のデータを表したものである。この質問に関しては、回答で一つだけ選択するように指示した。紙幅の都合から、2019年度と2020年度のグラフは省略した。3回にわたる本調査からわかったことは、いずれの年度の日本人学生も、「人間総合研究」をやって良かったことは、「自分の足りない能力に気づけた」「作品づくりが学べた」「親しい友だちができた」が上位を占める結果となっている。一方、留学生の場合は、トップ3まで多い順に、2018年度は「作品づくりが学べた」(10人29.4%)「自分の足りない能力に気づけた」(7人20.6%)「話す力(説明力・質問力)がついた」(6人17.6%)、2019年度は「作品づくりが学べた」(15人27.8%)「話す力(説明力・質問力)がついた」(14人25.9%)「自分の足りない能力に気づけた」(13人24.1%)、2020年度は「作品づくりが学べた」(9人25.0%)「自分の足りない能力に気づけた」(8人22.2%)「話す力(説明力・質問力)がついた」(7人19.4%)であった。

三年間を通して、日本人学生は、「自分の足りない能力に気づけた」ことが最も多かったことから、本実習が自身の能力と向き合うきっかけとなり、

図2「質問4.この実習をやってよかったと思うことは何ですか」の回答結果
2018年度



できなかった結果を謙虚に受け止めていることがうかがわれた。一方、留学生の場合は、2018年度から2020年度のいずれの年においても、「作品づくりが学べた」ことが最も多かったことから、自分のキャリアに直結するといった道具的役割として高く評価していると推察される。道具的役割とは、筆者は、学習者の動機付けの一種として挙げられる「道具的動機付け」(新版日本語教育事典)から発展した意味として使用している。それをする、給料が上がるとか待遇が良くなるといったことが学習の動機付けとなるように、本実習を学ぶことが、映像作品をつくるといった外発的な効果に直接つながると考えることを指す。

3. 分析と考察

3.1 最も大変だったことの原因から見てきた年度別の特徴

本節では、質問2で「大変だったこと」の最多となったものについて、日本人学生が選択した「クラスでの話し合い」と、留学生が選択した「言葉で説明すること」に注目し、その理由を尋ねた質問3で得た自由記述をもとに考察する。まず、自由記述欄に書かれていた内容を整理した。その際には、困難さの要因がどこにあると考えているかの内容によって「自己、他者、環境、その他」に分類し、2018年度、2019年度、2020年度について、それぞれの内訳と数値を表1-1から表1-3に示した。

2018年度では、表1-1にあるように、日本人学生と留学生の双方が最も大変だった「クラスでの話し合い」の理由としては、47の回答数(日本人学生25、留学生22)となった。その結果、大変だった理由についての内容を見てみると、日本人学生は、話し合いが大変になる原因が他者にあると認識している者が約半数を占めていた。

そして、さらにその内訳の半数は、話し合いにおいては、「意見がまとまらない」「一つにまとめなくてはならない」といった「手法」について言及していた。また、留学生の理由を見ると、「クラスでの話し合い」が上手いかなかった原因について、その半数近くの者が他者にあると認識していたと言えるが、話し合いの「手法」として「効率が低い」という理由を挙げている。日本人学生の考える話し合いの大変さとは、「まとめる」ための手法であるのに対して、留学生が考える話し合いの大変さとは、「効率の低さ」が大変さを感じる要因であったことが明らかとなった。ここでは、話し合いにより何かを決定する際に、クラスや班で参加者全員の合意や納得の上で

「まとめる」という方法が取られる場面がしばしばであった。そのため、日本人学生は、合意や納得を得られるまとめ方が大変だと認識していたことが推察される。しかし、留学生から見ると、時間をかけてじっくり話し合うことは効率的ではなく、むしろ時間の無駄であると認識していたと考えられる。つまり、話し合いに必要な手法に求めるものの意味合いが異なっていることが示唆されたと言える。

続いて、2019年度は、表1-2aにあるように、日本人学生が最も大変だった「クラスでの話し合い」の理由としては、49の回答数(日本人学生36、留学生13)を得た。その大変だった理由については、「クラスでの話し合い」において、日本人学生は、大変な理由の多くが他者にあると考えていることが明らかになり、その「他者」の内訳については、「様々な意見が出る中、それをまとめていくことが難しかった」「1人1人意見を述べていたのでまとまるまで時間がかかった」というように、話し合いの「手法」について「まとめる」難しさが実習の大変さだと認識されていたことが示唆された。一方、留学生は、「クラスでの話し合い」が大変であった理由として、その原因が、自分の日本語能力にあると感じていたことが明らかとなった。

さらに、表1-2bにあるように、留学生が最も大変だった「言葉で説明すること」の理由としては、49の回答数(留学生27、日本人学生22)となった。そして、「言葉で説明すること」が大変な理由では、留学生は、その原因の多くが自分にあると考えており、その内訳について見ると、「自分の意見を相手に適切に伝えるのが大変だった」からや、「メンバーにやりたいことをうまく説明できなかった」ためといった、日本語の「運用」面に多くの問題を感じていることが推察された。

以上の結果から、2019年度においては、留学生と日本人学生の協働作業を通した困難点について、日本人学生は、クラスでの話し合いに関して、話し合いの手法とも言える部分で苦勞していたと考えていたのに対して、留学生は、自分自身の日本語力が不十分だから話し合いで苦勞したのだと認識していた。

最後に、表1-3a,3bにあるように、2020年度では、日本人学生が最も大変だった「クラスでの話し合い」の理由としては、46の回答数(日本人学生32、留学生14)、留学生が最も大変だった「言葉で説明すること」の理由としては、40の回答数(留学生24、日本人学生16)となった。その結果、大変だった理由については、「クラスでの話し合い」において、日本人学生は、大変な理由の多くが他者にあると考えていることが明らかになり、その

表 1-1 2018 年度 もっとも大変だったことの理由

大変だったこと No.1 /日本人学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	7	性格	4	初めてで緊張してうまくいかなかった。 知らない人と意見を言い合うことが恥ずかしいし、まとめるのが難しい。(他 2 例)
		能力	3	周りの話についていけなかった。 意見をうまくまとめることができなかったから。(他 1 例)
他者	12	衝突	2	意見の違いで対立するときがあったから。 みんな自分の考えがあって、ぶつけあったから。
		違い	4	賛成や反対の意見が分かれて、なかなか話し合いが進まなかった。 どうしても発言する人としない人が出てくる。(他 2 例)
		手法	6	どんなものを撮るかで皆の意見がまとまらなかったし、意思の疎通がとれなかった。 色々な意見が出て、それを一つにまとめなくてはならない。(他 4 例)
環境	4	構成員	4	話し合いに参加しない人がいたので、なかなか進まなかった。 主に留学生とのコミュニケーション (他 2 例)
その他	2			※記載なし

大変だったこと No.1 /留学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	7	性格	3	クラスメートが提出した企画にあまり興味がなくて、やる気がなくなります。 最初は人見知りで、言いたいことをちゃんと話せなかったことが悔しかった。(他 1 例)
		能力	4	話すことはあまり上手じゃない。 自分自身日本語能力不足ってこと。(他 2 例)
他者	9	違い	2	日本語能力の低下とやり方の違いのために、留学生は日本人学生との話し合いを避ける。 意見が違う。
		手法	7	効率が低い。 民主で何かを決めるのは効率が低い。(他 5 例)
環境	4	構成員	4	中国人と日本人のバランスが悪かった。 質問する人が少なく、話し合いにならない。(他 2 例)
その他	2			※記載なし

表 1-2a 2019 年度 もっとも大変だったことの理由

大変だったこと No.1 /日本人学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	4	性格	3	自分も含めてふざけることが多かったため話し合いにもならなかった 自分の意見が言えなかった (他 1 例)
		能力	1	あまり意見を出すことは得意ではない
他者	20	衝突	2	企画を決めるのに軽くもめて大変だった 意見の違いなどがぶつかり合う事もあり、難しかった
		違い	3	1人1人違う意見を持っていて何かを決める際、つまづくことが多かった 1人1人の距離感が違うなかで自分の意見を言うから(他 1 例)
		手法	13	様々な意見が出る中、それをまとめていくことが難しかった 1人1人意見を述べていたので、まとまるまで時間がかかった (他 11 例)
		性格	2	自我中心の人はいるから、他人の意見を聞くふりして、実は無視した 話を聞かない
環境	9	構成員	9	クラス中の空気が悪くなったから 遅刻や風邪などでなかなか集まらなかった (他 7 例)
その他	3			※記載なし

大変だったこと No.6 /留学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	7	性格	2	クラスの日本人クラスメートとはあまりなじまないから (他 1 例)
		能力	5	日本語の能力が足りないので 自分の意見をはっきり出せなかった (他 3 例)
他者	5	違い	1	聞かない人が多い
		手法	3	遅刻が多いとかそういうことがいっぱい、効率が低い 2つの班に分かれたから (他 1 例)
		性格	1	自分の意見を話さない人
その他	1			理由はない

表 1-2b 2019 年度 もっとも大変だったことの理由

大変だったこと No.1 / 留学生『言葉で説明すること』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	26	知識	5	日本語で特別な単語が分からないときが大変だから 知る言葉は少ない、説明ができない（他 3 例）
		運用	19	自分が伝えたいことがうまく伝えられない 自分の考え方を日本語で詳しく説明のは難しかった（他 17 例）
		心理	2	恥ずかしいから 日本語はやはりむずかしい
他者	1	違い	1	班の中、日本語、中国語、韓国語の三つの言語を使用 している人がいるから

大変だったこと No.4 / 日本人学生『言葉で説明すること』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	14	知識	3	方言以外の言葉で表現できない言葉が多々あったから 自分の語彙力のなさがわかった（他 1 例）
		運用	9	自分の意見を相手に適切に伝えるのが大変 メンバーにやりたいことをうまく説明できていなかった ため（他 7 例）
		心理	2	説明するのは苦手だ ディスカッションに最初慣れておらず難しかった
他者	7	違い	2	母国語で話していたから 言語の壁を時々感じたため
		伝達	5	実際には伝わっていないことがあったから 留学生にも伝えないといけないから（他 3 例）
その他	1			理由はない

表 1-3a 2020 年度 もっとも大変だったこと理由

大変だったこと No.1 /日本人学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	8	性格	2	まったくちゃんとできなかったから (他 1 例)
		能力	6	アイデアは出るが、まとめられなかったり考えが浅かったりした 自分は話し合い苦手で人の意見に対しての感想などに苦労したから (他 4 例)
他者	21	衝突	4	意見を取り入れながらも自分の意見を通したい時にぶつかり合いになってしまった 意見をまとめるのが大変だった。また、意見の衝突があったのも大変だった (他 2 例)
		違い	5	育った環境、価値観が全く違う人たちが集まった為、意見がなかなかまとまらなかった みんなの作りたい方向性が違ったから (他 3 例)
		手法	7	意見が分かれるので、それをまとめるのが大変だった 一人ひとりの意見を聞き、全員が納得する結論を出すのが難しかった (他 5 例)
		性格	5	自我が強い人が意外に多かったから お互いが自分の話をしすぎて会話にならなかった (他 3 例)
環境	1	構成員	1	日本人が少ない班だったので、コミュニケーションをとるのが大変だった
その他	2			トラブルもあったけどいい話し合いになった

大変だったこと No.4 /留学生『クラスでの話し合い』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	7	性格	2	人が多い場所での話し合いはもともと苦手です(他 1 例)
		能力	5	日本語能力が足りなくてうまく話し合えなかった 日本語能力が不足している (他 3 例)
他者	6	違い	2	やっぱり言葉は違うから交流することはむずかしい (他 1 例)
		手法	2	企画者とプロデューサーの意見が合わないと進行しない うまく意見がまとまらなくて、時間を消耗した
		性格	2	やる気のある人とない人と考え人がいるから共同作業の壁 自分の意見を聞いても返事がない
環境	1	構成員	1	つくる経験があるかどうか、作品に対するつくる方法と順番が違う

表 1-3b 2020 年度 もっとも大変だったことの理由

大変だったこと No.1 / 留学生『言葉で説明すること』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	20	知識	8	時々言葉が思い出せない 日本語能力が不足している (他 6 例)
		運用	10	自分の意見を説明する時うまく自分が話したい内容を相手に伝えられない 自分の意見をまず中国語で考えて、日本語に変える時間がかかったから (他 8 例)
		心理	2	自分の意見がちゃんと伝わらないことを心配している 時々「言葉の壁」を感じる
他者	4	違い	3	日本人と考え方違うので、日本語が分かっていても伝えにくい みんなそれぞれの考え方が違う (他 1 例)
		反応	1	意見を無視される事がある

大変だったこと No.5 / 日本人学生『言葉で説明すること』

大分類	回答数	小分類	回答数	主な回答例
自己	12	知識	2	語彙力が足りなかった 自分の語彙力で留学生とどれだけ話せるか。知識の無さに絶望した
		運用	10	留学生にできるだけ簡単に要点を伝えるために言葉を選ぶのが大変だった 自分の考えが相手に上手く伝わらなかったことがあったから (他 8 例)
他者	4	違い	2	留学生とのコミュニケーションが難しかった 班に留学生が多く、イメージの共有が難しかったから
		伝達	2	日本人なのに日本語が伝わらない人がいた 話が通じなかったから

「他者」の内訳については、話し合いをまとめる「手法」、自分の意見を通したい人との「衝突」や育った環境・価値観の「違い」によってまとまらない、また、他者の「性格」によるものが原因で難しいと考えていることがうかがわれる。一方、留学生は、「クラスでの話し合い」が大変であった理由として、その原因が、自分にあると考える傾向があることが判明した。また、「言葉で説明すること」が大変な理由でも、留学生は、その原因の多くが自分にあると考えており、その内訳について見ると、日本語の「運用」面に多くの問題を感じていることが推察された。その背景として、この年の留学生は、例年の留学生に比して参加意欲が強く積極的であったことから、学生自身が内に伝えたいことやアイデア等をより多く持っており、それを伝える術により不自由さを感じることに繋がったのではないかと考えられる。

以上のことから、2020年度においては、留学生と日本人学生の協働作業を通した困難点について、日本人学生は、クラスでの話し合いに関して、他者との違いや衝突を問題視しているのに対して、留学生は、他者との違いよりも自分の能力を問題視していた。また、言葉で説明することの困難さは、留学生だけの問題ではなく、日本人学生にとっても、その運用について困難さを感じる要因となっていたことが判明した。

3.2 アンケートの自由記述による質的分析

本節では、質問3で得た自由記述形式で尋ねた「大変だった理由」について、大谷（2008）によるSCAT(Step for Coding and Theorization)に基づく質的分析を行い、2018年度、2019年度、2020年度について、「人間総合研究」における、各年度の協働作業による作品づくりに関する困難さの理論的記述を試みる。

SCATとは、質的調査データなどの分析手法であり、インタビューやアンケートの自由記述などによって得られたデータをもとにコード付けをし、そのコードを使って理論化を行うものである。SCATにおけるデータ分析の流れは、〈1〉テキストの注目した語句を抜き出す 〈2〉抜き出した語句を言いかえるテキスト外の語句を記入する 〈3〉〈2〉を説明するためのテキスト外 の概念を記入する 〈4〉テーマ・構成概念を記入する 〈5〉テーマ・構成概念を紡いでストーリーライン⁸を記入するといった手順で行う。ここで注意す

8 大谷（2019）は、ストーリーラインを「できごとをその関係性を含めて記述し

べき点は、最終的に得られる結果は、量的研究に見られる一般性や普遍性とは異なるものであり、質的研究の一般化は論文の結論自体にあるのではなく、論文の読者が読んで、自身と関連するケースに当てはめながら比較し、自分のケースのために「翻訳」することによって、その結論の適用が可能となるのであり、そこで初めて一般化が実現される（大谷 2019）ことである。

2018 年度から 2020 年度まで各年度の大変だった理由の記述をサンプルとし、筆者の視点で SCAT の手順に沿って抽出された語句を 4 段階によって構成概念化し検討後に、ストーリーラインを作成した。ここで、2020 年度の分析過程の一部を図 4 に示す。なお、2018 年度と 2019 年度の分析過程は、紙幅の都合から省略することとした。

まず、2018 年度については、「最も大変だったこと」で最多であった「クラスでの話し合い」の自由記述から抽出した 43 名分（日本人学生 23 名、留学生 20 名）のサンプルを SCAT により質的に分析した。その結果、日本人学生に最も多く表れている記述要素から分析した主な構成概念は、〔意見を 1 つにまとめる〕と〔文化や言語が異なる〕や〔差異と意思疎通〕であり、そこから得られたストーリーラインは、「日本人学生は、意見が一つにまとまらないことで、話し合いが大変だと感じている。そして、異なる意見や多様な意見とどう折り合いをつけ先に進めばいいのか分らず、時には衝突したりぶつかり合ったりしている。それらの原因として、クラス内の留学生との意思疎通の難しさを挙げる者が多く、言語や文化の違いによる大変さだと感じている。そして、留学生と協働で進めること自体が、作品づくりという初めての未知の体験での大変さに加わる大きな負担感となっている。」である。一方、留学生の記述要素から分析した主な構成概念は、〔話す力〕と〔話し合いの効率性〕や〔不満と批判〕であり、浮かび上がったストーリーラインは、「留学生がクラスでの話し合いで大変だと思うのは、日本語力が不十分だからであり、日本語で話し合うことの難しさが大きな壁だと考えている。そのため、話すことに自信をつけることで積極的に参加できるようになると思っている。また、クラスでの話し合いについては、決め方に無駄な時間を

たもの」と説明している。例えば、ストーリーが「王様が死にました。その後、お后様が死にました」の場合、そのできごとを起きた順に記述するのではなく、ストーリーラインは「お后様が死にました。それは、王様が死んだ悲しみのためでした」となるという。

使って効率的ではないと捉えている。さらに、異なる意見には妥協を許さない傾向が見られる。」(守内 2019) というものであった。以上のことから、2018 年度の日本人学生及び留学生のストーリーラインに基づいて考察した理論記述を示す。

【2018 年度における最も大変だったことの理論記述】

- ・話し合いにおける強い前提意識が存在することにより、多種多様性が生かされにくい。
- ・異言語異文化との向き合い方への不自由さがうかがわれる。
- ・協働作業に関する未知の経験をプラスに転換することが課題となっている。
- ・語学力によるコミュニケーションへの影響が大きい。
- ・話し合いに要する時間の使い方に対する認識の食い違いが見られる。
- ・排他的な感情と意識があると、対話的なやり取りが成立しない状況が生まれる。

続いて、2019 年度については、日本人学生にとって「最も大変だったこと」で最多であった「クラスでの話し合い」の自由記述から抽出した 33 名分と、留学生にとって「最も大変だったこと」で最多であった「言葉で説明すること」の自由記述から抽出した 27 名分のサンプルを SCAT により質的に分析した。その結果、日本人学生の自由記述から分析した主な構成概念は、〔議論の方法模索〕〔多様な意見〕〔メンバーとの関係性〕〔困難さからの学び〕であり、そこから得られたストーリーラインは、「日本人学生は、議論の場が成立する条件の欠如を問題視すると同時に、議論の混乱における収束法について模索していた。その際には、多様な意見や異なる意見が出ることを議論の障壁と認識する傾向がある。また、クラスにおけるお互いの関係性に敏感であると同時に、困難さの原因と見ていた。さらに、気づきを得られた学生は、困難さを経験したことから、自己主張のあり方や他者受容の大切さを学ぶことができた。」であった。同じく、2019 年度の留学生の自由記述から分析した主な構成概念は、〔絶対的な存在としての日本語力〕〔母語と学習言語のレベル差〕〔言語能力から感じる負の意識〕であり、そこから得られたストーリーラインは、「留学生が大変だと思うのは、日本語力の問題だとする前提意識があり、映画大学ならではの専門用語や現場用語が不十分だと考えているからだ。また、母語であれば伝えられる意見やアイデアはあ

ると思っている。そこには、母語と学習言語との格差とインプット不足とアウトプット力の弱さが見て取れる。一方で、言語力を基準とした場合の苦手意識や劣等感を抱く傾向が見られる留学生も少なからず存在している。」であった。これらのことから、日本人学生及び留学生のストーリーラインに基づいて考察した理論記述を示す。

【2019年度における最も大変だったことの理論記述】

- ・話し合いの場づくりを意識的に行う必要性が顕著であった。
- ・多種多様性の受け止め方を間違えると、豊かな話し合いを生む可能性を阻む。
- ・構成メンバーへの関係性を敏感に捉える傾向が見られる。
- ・母語での思考に自信があることで、学習言語での発信力の弱さが際立って意識される。
- ・現場でのコミュニケーションに必要な日本語力について考える必要がある。

最後に、2020年度については、日本人学生にとって「最も大変だったこと」で最多であった「クラスでの話し合い」の自由記述から抽出した32名分と、留学生にとって「最も大変だったこと」で最多であった「言葉で説明すること」の自由記述から抽出した24名分のサンプルをSCATにより質的に分析した。その結果、日本人学生の自由記述から分析した主な構成概念は、〔言語と文化や意見の異なり〕〔話し合いでの衝突と混乱・停滞〕〔プラスの経験と捉える〕であり、そこから得られたストーリーラインは、「日本人学生は、意見の衝突や異見との調整において、異言語・異文化による混乱と多様な意見の扱いへの困惑で話し合いが大変になると考えている。そして、チーム内でリーダー的な役割を果たそうとする学生は、メンバーへの配慮にも負担感を抱いたり話し合いで合意に至るプロセスの対処法が見つからなかったりする。その結果、分かり合えないというところで停滞してしまった。一部ではあるが、揉め事を乗り越えたことをプラスの経験と捉えているケースもあった。」である。さらに、同じく、2020年度の留学生の自由記述から分析した主な構成概念は、〔日本語での説明力と伝達力〕〔言葉の壁〕〔言語力と人間関係〕であり、そこから得られたストーリーラインは、「留学生は、初めての協働実習に必要な日本語力として、説明する力と伝える力が不十分なことが言葉の大変さだと考えている。そして、言語の壁は自分の課題だと認識したり、母語からの翻訳によるタイムラグで説明を諦めたりして

いた。また、日本語の問題によって距離感を抱き、親疎関係の目安とすることもあるようだ。」であった。これらのことから、日本人学生及び留学生のストーリーラインに基づいて考察した理論記述を示す。

【2020年度における最も大変だったことの理論記述】

- ・異文化接触によって、カルチャーショックのような現象が見られる。
- ・チームのリーダーにはファシリテーション能力の育成が必要となる。
- ・活躍の条件として、絶対的な日本語力が必要であるという意識を持っている。
- ・語学力と人間関係力は相関関係にあると思っている。
- ・問題解決型の異文化コミュニケーションの学習が望まれるのではないか。

図4 2020年度の大変だったことの自由記述からの分析例の一部

2020年：アンケート結果 SCAT / 大変だったことの No. 1 『クラスでの話し合い』 / 日本人学生

番号	テキスト	〈1〉 テキスト中の注目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語句の言い換え	〈3〉 左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉 テーマ構成概念（前後や全体の文脈を考察して）
1	意見を取り入れながらも自分の意見を通した時にぶつかり合いになってしまった	意見を取り入れる意見を通してぶつかる	意見交換の衝突	ディスカッションにおける衝突が壁	ディスカッションでの壁となるのが衝突だという認識
2	それぞれの意見を1つにまとめ、全員の納得がいくように作品に反映させることが困難だったから	意見を1つにまとめて全員納得の難しさ意見が作品に反映できない	話し合いでの納得困難作品への反映困難	合意システムの未定着	チームで動くための合意のプロセス
3	意見が食い違う中で、自分の意見と相手の意見の妥協点を考えるのが難しかったから	意見が食い違う自分の意見と相手の意見の妥協点が困難	異見の調整失敗妥協の困難さ	ディスカッションにおける異見調整スキル未成熟	異見との調整などの議論におけるスキルが備わっていない状況
4	1人ひとりの意見を聞き、全員が納得する結論を出すのが難しかった	1人ひとり聞く全員が納得する結論の難しさ	参加者の尊重納得と結論	リーダー意識と統括力問題	グループのリーダー意識と統括力とのバランスが問題
5	意見をまとめるのが大変だった。また、意見の衝突があったのも大変だった	意見まとめが大変意見の衝突が大変	意見の扱いへの戸惑い衝突への抵抗感	ファシリテーター的役割を担うリーダーの育成	チームの話し合いにおけるリーダーのファシリテーション力育成の必要性

6	育った環境、価値観が全く違う人たちが集まった為、意見がなかなかまとまらなかった	育った環境と価値観の違う集団意見がまとまらない	異文化接触によるショック現象	異文化・異言語に起因する混乱	異文化・異言語による混乱状態
7	1人1人が意見の主張の仕方が違うのを平等に拾う作業の難しさを実感した	主張の仕方が違う中での平等の難しさ	参加時の意見述べとファシリ問題	ファシリテーターの役割を担うリーダーの育成	グループのリーダーファシリテーション力の育成が課題

(一部を掲載、番号8～26省略)

27	やりたいことがそれぞれ異なり、大変	やりたいことが異なる大変さ	意欲の向かう方向の異なり	向かう方向性のバラバラ感	チーム内にあるバラバラ感と意欲の向かう方向性の違い
28	話がうまくまとまらなかったから	話が上手くまとめられない	まとめるという技の未熟さ	前提意識	結論は1つという前提意識
29	みんなの作りたい方向が違ったから	作りたい方向性の違い	作りたい方法の異なりを問題視	個性の集団	意欲の向かう方向性の異なる個性的な集団
30	どういう作品にするか、どう進めるかなどの話し合いがなかなか進まなかった	話し合いが進まない	作品の向かう方向と進め方がストッパー	チームの決定権	チームの決定権の所在
31	自分は話し合いが苦手で人の意見に対しての感想などに苦労したから	話し合いが苦手人の意見に感想が言えない	苦手意識 意見への感想に苦労	コメント力不足の認識	ディスカッションに必要なコメント力育成の必要性認識
32	体験の絶対性を“教える”のはとても難しい	自分の体験が絶対だと教える難しさ	自身の体験への絶対視	立場への勘違い存在	仲間意識の欠如

ラ ス ト イ リ ン グ	日本人学生は、意見の衝突や異見との調整において、異言語・異文化による混乱と多様な意見の扱いへの困惑で話し合いが大変になると考えている。そして、チーム内でリーダー的な役割を果たそうとする学生は、メンバーへの配慮にも負担感を抱いたり、話し合いで合意に至るプロセスの対処法が見つからなかったりする。その結果、分り合えないというところで停滞してしまった。一部ではあるが、揉め事を乗り越えたことをプラスの経験と捉えているケースもあった。				
理 論 記 述	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化接触によって、カルチャーショックのような現象が見られる。 ・チームのリーダーにはファシリテーション能力の育成が必要となる。 ・問題解決型の異文化コミュニケーションの学習が望まれるのではないか。 				

アンケート結果 SCAT / 大変だったことの No.1 『言葉で説明すること』 / 留学生

番号	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ構成概念 (前後や全体の文脈を考察して)
1	自分の意見を説明する時、うまく自分が話したい内容を相手に伝ええない	自分の意見を上手く伝えられない	日本語で意見を伝える困難さ	必要な日本語力の鍵	伝わる日本語の欠如
2	日本語でうまく説明できない、意見を無視されることがある	上手く説明できない 意見を無視される	日本語での説明力不足 意見無視への不満	メンバーへの不信感と日本語力	不信感の背後にある日本語力問題
3	日本人と考えが違うので、日本語分かっていても伝えにくい	日本人との違い 伝えにくい	日本人との考え方の違いからくる伝わらなさ	日本人観と伝達	前提意識となる日本人観の存在による相互理解の障壁
4	アイデアの共有とか、説明とかむずかしかった	アイデアの共有と説明が難しい	共有の困難さ 説明の困難さ	困難さの認識	説明と共有の困難さ認識
5	自分のイメージと思いをちゃんと説明することが下手です。日本語の問題だと思います	イメージと思いの説明下手	説明力不十分さの認識	求められる日本語力の自覚	必要な日本語力不足の自覚
6	自分の意思がちゃんと伝わらないことを心配している	自分の意思が伝わらない	伝わらない不安感	伝達問題	日本語による伝達の問題
7	どんどん良くなったが最初には皆とも親しくないし、言語能力が足りなくて、自分が思ったことを言葉で説明するのが難しかった。何かを言う時まで、時間がかかったり諦めた	親しくない 言語能力不足 思考と言葉での説明難 時間がかかり諦める	親しさの必要性 日本語力不足の認識 時間意識による諦念	チームでの親疎関係と日本語問題 翻訳の日本語	親疎関係と日本語力との相関関係 翻訳によるタイムラグ問題

(一部を掲載、番号 8～15, 22～24 省略)

16	日本語能力不足	日本語能力不足	日本語能力への問題意識	課題の意識化	実習における課題の意識化
17	時々言葉の壁を感じる	感じる言葉の壁	言語の違いから感じる壁	言語問題の束縛	異言語という壁による束縛

18	やっぱり言葉がちがうから交流することは難かしい	言葉の違いと交流の難しさ	言語の違いによる交流の齟齬	異言語問題の呪縛	異言語によるコミュニケーションスキル不足
19	時々言葉が思い出せない	言葉が思い出せない	語彙記憶問題	語彙の定着と記憶	長期記憶と短期記憶
20	日本語と想像力が足りないから	日本語力不足 想像力不足	言語能力不足感 イマジネーション不足感	未到達能力の自覚	到達目標とする能力の認識
21	日本語が上手じゃない	上手ではない日本語	日本語能力への問題意識	日本語問題	足かせとなっている日本語力不足の自覚

ラスト イ リ ン	留学生は、初めての協働実習に必要な日本語力として、説明する力と伝える力が不十分なことが言葉の大変さだと考えている。そして、言語の壁は自分の課題だと認識したり、母語からの翻訳によるタイムラグで説明を諦めたりしていた。 また、日本語の問題によって距離感を抱き、親疎関係の目安とすることもあるようだ。
記 述 論	・活躍の条件として、絶対的な日本語力が必要であるという意識を持っている。 ・語学力と人間関係力は相関関係にあると思っている。

3.3 調査を振り返って

まず、「話し合い」に関する認識として、「答えを1つに絞る」ためには、多様な考え方や異なる意見は排除しなければ、結論に至る妨げとなると、捉えてしまっていないかという疑問が残る。そこには、話題を共有しながら葛藤が表面化しても、他者の発言に対して複数の発言を重ねていくような話し合いが望ましいのではないだろうか。若木(2011)によると、話し合いの指導には、意欲や価値といった情意的側面に対する指導とともに、話し合いに参加している学習者個々の心的作業に対する指導が行われなければならないと言う。協働で作品をつくり上げるための話し合いでは、結論を1つに絞らなければならないケースがあったとしても、そこに至るプロセスにおいて、多種多様な意見と向き合い、異なりを受け入れながら対話を積み重ねていく必要がある。そのためには、話し合いにおけるコミュニケーション・スキルトレーニングが効果的であると考えられるが、同時に、話し合いの前段階としての場づくりの意識化を欠かすことはできない。その場合の望ましい場とは、学生の内に、「安心感、親近感、信頼感、共感、異質性への寛容、受容的雰囲気」(渡部 2011)が芽生える環境だと言えるだろう。

さらに、留学生が絶対的な日本語力として囚われている言葉の問題とは、流暢に話せ、相手を納得させられるような説明ができる日本語を操れることだと考えているのではないかという点である。確かに、日本人学生と対等に

議論するためには、それなりの語彙力と知識を持たねばならないだろう。しかし、発音に多少の難があり、少々拙い日本語であったとしても、伝えるべき内容が鋭いものであったり、言葉以外の部分で周囲への配慮や気遣いが行動として示せたりする学生は、チームへの貢献度が認められるものである。また、本実習においては、言われた指示そのものの背後にある文脈や講師の意図を汲み取ることが重要となる。そこでは、実習が本格化される前段階としての関係づくりが望ましい。そのためには、「隙間の対話」（清水、宮崎 2021）と呼ばれる、学生同士であったり、指導講師と学生とであったりとの雑談的対話が有効となってくる。筆者は、この場合の「対話」とは、単なるお喋りを意味するのではなく、ある共通の話題をもとに、それぞれが自分固有の体験や実感、価値観などを語り合いながら、新たな価値や解決策を共創していくための言語活動・非言語活動であると考えている。そして、外国語でやり取りする上では、学習者の心理的な阻害となる情意フィルターを下げることが、第二言語習得においては良い影響を及ぼす。同時に、コミュニケーションの目的が果たせなくなった事態を乗り越えるために用いられる方法の1つとして、積極性や自己表現力を養うためのコミュニケーション・スキルのトレーニングを行い、言葉ができなかったり不十分だったりした際に、何か別のものによってそれを補うストラテジー能力を身につける指導が急務であると考えている。

3.4 今後の課題

本研究では、2018年度、2019年度、2020年度の「人間総合研究」を対象に、実習終了後のアンケートを中心に分析し、各年度の学生たちが感じた困難点の特徴とその背後に考えられる問題点と有効な支援の方法について考察した。今回は、日本人学生と留学生の全体に見られる現象を明らかにすることはできたのではないだろうか。しかし、個々人の詳細については触れることができなかったことから、今後は、インタビューデータをもとに、日本人学生と留学生の協働作業に関する学習者の学びや変容についての分析を試みたいと考えている。そして、「人間総合研究」を経験した後の、その後の学習者の成長については、追跡調査が必要であるだろう。また、本稿での留学生とは、その9割が中国語母語話者であり、中国本土出身者であったことから、そのことが分析結果に如何に反映しているかについては、言及することができなかった。併せて今後の課題としたい。

また、留学生に関して、日本語能力の一つの目安となる「日本語能力検定

試験 N1」の取得状況について見てみると、本実習が行われた時点で、2018年度は19%、2019年度は24%、2020年度は13%であった。また、各年度の「人間総合研究」12班において留学生がプロデューサー⁹を務めたのは、2018年度は2名、2019年度は1名、2020年度は3名となっている。このことから、実習時の段階での大変さは、留学生のN1取得者割合と単純には結びつかないと言える。しかし、本実習から1年半後のN1取得率には大きな違いが見られ、2018年度生が約27.1%であるのに対して、2019年度生は約46.3%と増加していた(本学留学生支援部門の調査)¹⁰。2019年度生の日本語能力試験N1取得率が大きく伸びたのには、どのような要因が関係しているのであろうか。また、それによって、その後の協働創作における人間関係の構築にも繋がっていったのかどうか。N1取得によって、ものづくりへのモチベーションには影響はあるのか否か。併せてこれらの点も調査していきたい。

さらに、筆者は、ものづくりのプロである指導者たちが、一般的な教育者や言語教師とは異なる物差しで学生たちに対峙する場面から、多くの衝撃と刺激を受けたと実感している。今後は、指導講師を対象としての調査研究¹¹も進め、Z世代と呼ばれる日本人学生と近年増加傾向にある留学生の指導経験の取材を行い、共修場面に有効なアプローチを模索することも課題としたいと考える。

4. おわりに

最後に、大学生が人間関係を構築する上で必要なコミュニケーション力

9 「人間総合研究」では、6クラス12班で実習を行うため、各班には1名のプロデューサー役を担う学生が存在し、全体としてはプロデューサーが12名いることになる。

10 日本映画大学には、留学生支援部門があり、ビザの更新や日本語サポートなどの業務を担っているが、留学生登校日を実施して、日本語能力試験などの受験や合否の状況を聞き取った上でのデータを集積している。

11 筆者は、すでにインタビュー資料をもとに、一部の成果をTAE研究会(2020年)のシンポジウムにて、「突破していく小さな場所——ものづくりのプロから学んだプロジェクト教育の極意」と題して発表している。

とは、どのようなものであるのかである。本学におけるものづくりを協働で行う実習型の共修授業を通して得た知見をまとめると、身体性とでも呼ぶべき側面が浮かび上がってきた。具体的には、「言葉に即時対応できる身体」、「周囲を見回せる身体」、「現場で動ける身体」であると考えている。それは、いわゆる、外に開かれた柔軟な身体とでも言えるもので、他者に対して「自己」を開き、変化しながら自分らしさを確立していける構えである。そして、育った環境や価値観の異なる文化とは、外国文化とは限らないものであり、世代間や地域間による異文化も存在する。そのような広い意味での異文化体験とは、本学での実習そのものも包含するものであり、大学入学までに受けてきた教育とは質の異なる学びを体験することである。そこでは、「学びほぐし」と「学び直し」がなされねば適応していくことが難しいと言えるだろう。外に開かれた柔軟な身体を持つことによって、AでもBでもない、新しい、「第三の文化」とでも言う世界を共に構築していくことが可能となるのではないだろうか。異質なものを、理解できないものとして、向き合うことを避けるのではなく、相手と自分の文化的背景が異なることによるコミュニケーション上の難しさが生じることに気づき、事実に基づいた確かな知識を持ち、実際に目に見えた行いをする。そのためには、異質な文化に出会った時、そこでの文化・行動様式をどれだけ受け入れることができるかといった、「トレランス＝寛容」性を育てなければならないだろう。そして、互いに親しい感情が通い合う状態で打ち解けて話ができる関係（ラポール）が形成されれば、感情や情緒的コミュニケーションを回復し、相互に認め合える人間関係を構築することができるのではないかと考える。

作品をつくり上げる過程で起きる問題を観察していると、留学生の日本語レベルの問題という括りでは捉え切れない現象が起きているのを強く感じた。また、筆者は、その協働作業の工程を調査する過程で、各クラスに生まれるユニークな人間関係が織りなす事件やドラマに触れてきた。そして、長年抱えてきた日本語教師として重要だと認識してきた「正しい日本語」という前提意識が揺らぐ瞬間に直面してきたと言える。一言語教師としては微力な存在ではあるが、今後も、専門分野や指導方法の異なる教員との協働を図りながら、変化する社会の中で、協働創作を中心に据えた日本映画大学の教授法が提示する可能性について、さらに追究していきたい。

参考文献

- ・大谷尚（2007）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法の提案 — 着手しやすく証拠簿データにも適応可能な理論家の手続き —」『名古屋大学大学院教育発達研究科紀要』（教育科学）54,2、27 - 44
- ・大谷尚（2019）『質的研究の考え方 — 研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会
- ・小木曾左枝子（2021）「合同授業による異文化間コミュニケーション力の開発 — 日本人学生と留学生とのディスカッションからの一考察」『富山大学教養教育院紀要』第2号、64 - 74
- ・梶原雄（2020）「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか — 同志社大学の日本人学生からの視点 —」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第17号、93 - 111
- ・門脇薫・中山英治・高橋雅子「(2021) タイ人教師と日本人教師のよりよい協働を実現するために必要な要素 — 高校における事例より —」『間谷論集』15、1 - 21
- ・公益社団法人 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- ・齋藤孝（2018）『コミュニケーション力』岩波新書
- ・清水稔、宮崎充治（2021）「初年次教育におけるコミュニケーションの構築と『知の技法』生成～コロナ禍におけるオンライン学習の中で～」『弘前大学教養教育開発実践ジャーナル』第5号、33 - 47
- ・末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編著（2019）『国際共修 — 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
- ・多田孝志（2010）『対話力を育てる — 「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション』教育出版
- ・中井陽子（2021）「話し合いの変遷プロセスの分析 — 中国人日本語学習を対象としたオンライン授業を対象に —」『東京外国語大学論集』第102号、99 - 110
- ・中本進一（2018）「多文化共生政策としての『留学生30万人計画』～異文化間教育的視座からの考察～」『埼玉大学紀要（教養学部）』第53巻第2号、315 - 326
- ・楢林衿子・浜崎隆司（2020）「教師と児童・生徒、同僚との人間関係形成における選択理論心理学の理念と実践の有効性」『応用教育心理学研究』第38巻第1号、47 - 61

- ・細川英雄（2019）『対話をデザインする ― 伝わるとはどういうことか』ちくま新書
- ・宮里恭子（2017）「授業における日本人学生の異文化間コミュニケーション力育成 ― 学生による授業評価と自己分析の視点から ―」『白鷗大学教育学部論集』2017,11(3)、113 - 152
- ・守内映子（2021）『国際交流と学校教育 ― グローバル時代を共に生きるために』多田孝志監修 守内分担執筆 116 - 130 項、三恵社
- ・守内映子（2019）日本国際理解教育学会第 29 回研究大会研究発表「留学生と日本人学生のクリエイティブな共生を模索する大学の授業 ― 芸術系大学における実習型演習をケーススタディーとして ―」2019 年 6 月
- ・若木常佳（2011）「話し合いの指導を支援する教材の開発 ― 指導者の活用事例から ―」『教育実践研究』第 18 号、191 - 198
- ・渡部淳（2011）『学びのウォーミングアップ 70 の技法』旬報社
- ・『国内の日本語教育の概要 ― 令和 2 年度 日本語教育実態調査報告書』令和 2 年 11 月 1 日現在 文化庁国語課
- ・独立行政法人日本学生支援機構（Japan Student Services Organization）
「学生支援に関する各種調査 ― 留学生数の推移」
〈<https://www.jasso.go.jp/statistics/index.html>〉（参照 2021 年 11 月 30 日）
「平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査」
〈<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/seikatsu/data/2017.html>〉（参照 2021 年 11 月 30 日）

【資料】アンケート用紙

質問 1. あなたの第一言語は何ですか。次の中から選んでください。

日本語 中国語 韓国語 英語 その他()

質問 2. 「人間総合研究」の実習を通して大変だったことは何ですか。

次の名から、特に大変だったことを3つ選んでください。

- a. 企画を出すこと b. クラスでの話し合い c. 取材対象者とのやり取り
d. 取材をすること e. クラスメイトとの付き合い f. 言葉で説明すること
g. SNSを使ったやり取り h. 編集作業 i. 発表すること
j. 講評を聞くこと k. 担当講師とのやり取り l. その他()

質問 3. 上の質問で選んだ3つの項目について、その理由を教えてください。

()には選んだ記号を書いてください。

() _____

() _____

() _____

質問 4. この実習をやってよかったと思うことは何ですか。

- a. 親しい友だちができた b. 作品づくりが学べた
c. 話す力(説明力・質問力)がついた d. 人の話を聞き入れられるようになった
e. 自分の足りない能力に気づいた f. その他()

質問 5. もう一度、「人間総合研究」をするとしたら、どんなことに気をつけたいですか。

質問 6. 今、「人間総合研究」の実習を思い出して、今、どんな感じがしますか。

自分の心に感じることを、3つの言葉(文章でなく単語)で表してください。



質問 7. あなたの班が発表したタイトルは何でしたか。

Collaborative art projects and the roles of communication: A research analysis of intercultural classrooms at Japan Institute of the Moving Image

Moriuchi Eiko

[Abstract]

There were 279,597 overseas students in Japan in 2020, of which 218,783 – a little over a 78 percent – were enrolled in higher education. The Japan Institute of the Moving Image (Kanagawa, Japan), a film school offering four-year bachelor’s degree courses, has seen a rapid increase in the number of overseas students over the past five years. When the overseas student number reached 40 percent of the total, there emerged a historically new intercultural environment in the classroom, where both overseas and domestic students participated in the collaborative and creative tasks of filmmaking for the first time in their lives.

The focus of this research was a first-year compulsory subject entitled “Ningen sogo kenkyu”, an intensive practical class involving group work in the making of a documentary about one person of their choice outside the university. The main topic of the present paper is to explore students’ perceptions of where they find communication difficulties during this eight-week period of intense intercultural and interlingual collaboration. Students from years 2018, 2019, and 2020 responded a questionnaire after completing a final presentation of their work. The methods employed to analyze the collected data were a combination of quantitative analysis for responses to multiple-choice questions and qualitative analysis in the case of freely written answers to a question about perceptions of the causes of difficulties they faced during group work.

The data show that there was a significant divide between the Japanese native speakers and those who are learning Japanese. The former demonstrated a strong desire to reach consensus during group discussions. When unable to do so, these students found it hard to enjoy the intercultural and interlingual environment, and hence found it challenging to accept diversity. This group focused on the group dynamic as the main problem.

The latter group members (learners of Japanese), in contrast, tended to focus on their own language skills as the cause of difficulties. This group essentially blamed themselves for difficulties during group work.

Based on my analysis of the data, I discuss possible ways in which we can assist students to improve their experience of intercultural collaboration in the classroom and beyond.

[Keywords]

collaborative creative arts, group discussion, Japanese native speakers, learners of Japanese, corporeality (body language)